

近代文学研究叢書

第二十八卷

昭和42年8月15日 印刷
 昭和42年8月20日 出版
 昭和49年11月10日 再版出版

[¥2500]

著者	昭和女子大学近代文学研究室
発行者	東京都世田谷区太子堂一丁目七番地 小林寅次
印刷者	東京都千代田区神田錦町三丁目十四番地 梶原忠幸
発行所	東京都世田谷区太子堂一丁目七番地 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座東京一七〇八六七番 電話代表(42)五一三一番

近代文学研究叢書

第二十八

昭和女子大学

近代文学研究室

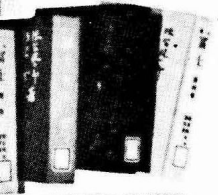
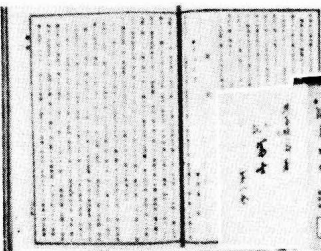
口 絵 写 真

物	片	大	大	九	グ	徳
集			槻	條	リ	富
	上	矢			フ	
高			文	武	ィ	蘆
見	伸	透	彦	子	ス	花

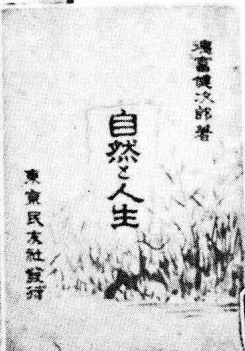
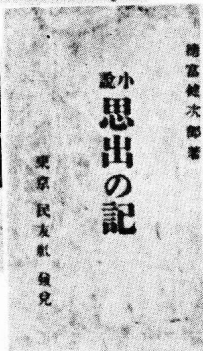
徳 富 蘆 花

処女作『孤墳之夕』—同志社
文学雑誌明治二十年五月所
載（昭和女子大学蔵）
小説集「富士」一巻—四巻
（昭和女子大学蔵）

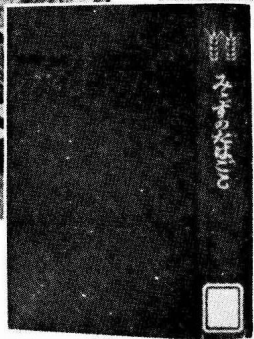
蘆花肖像



訪ソ中トルストイ翁（左）とトルストイ夫人（右）と同乗（中央）の蘆花



恒春園内にある
蘆花夫妻の墓

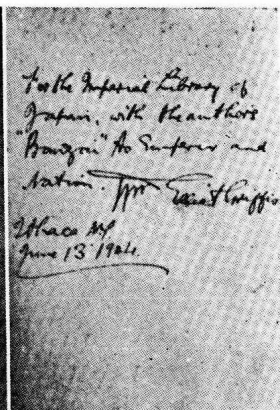
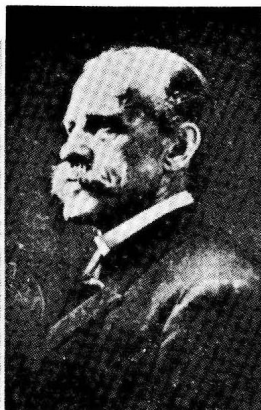
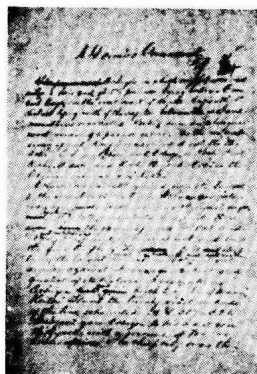


能本市大江町三六三番地の蘇峰蘆花兄弟が住んだ跡

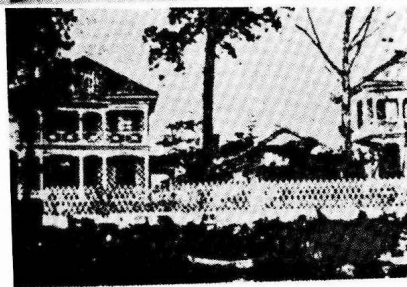
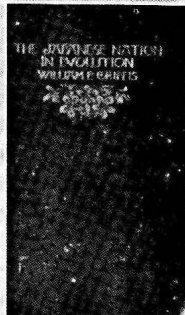
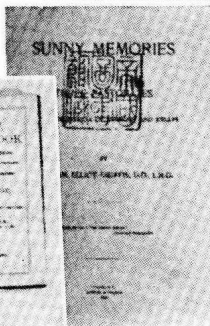
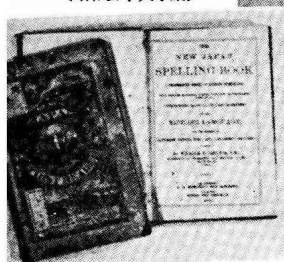
「みみずのたはこと」一大正二年三月刊（昭和大学
中段 中央—「思出の記」—明治三十四年五月
（昭和女子大学蔵）

W・E・グリフィス "Sunny Memories of Three
Pastrates, 1903 の表紙裏の自筆
(国立国会図書館蔵)

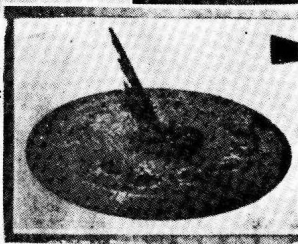
未刊自筆原稿の「大名政府」



'Spelling Book, 1872'
'First Reader, 1873'
(昭和女子大学蔵)

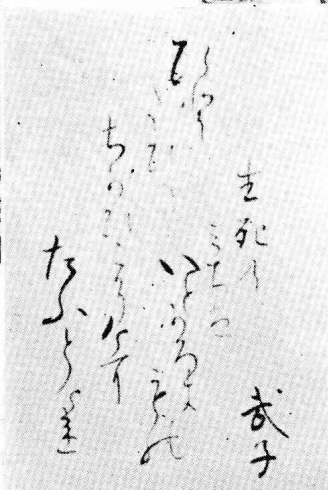
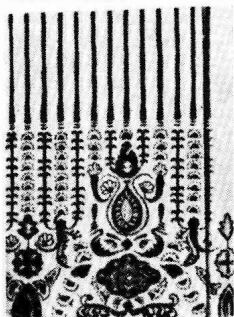
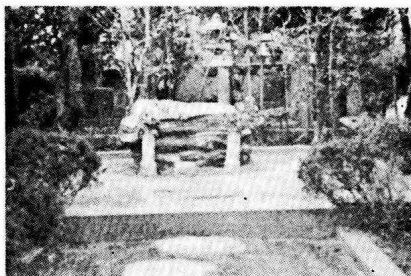


中段右
"The Japanese Nation in
Evolution 1907" (国会図書館蔵)
中段左
"Sunny Memories of
Three Pastrates, 1903" (国会
蔵)



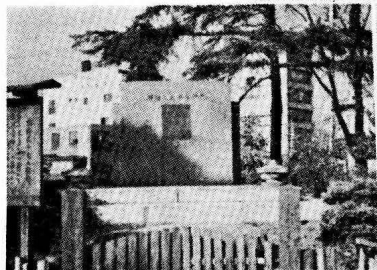
福井に贈られた日時計
中段中—"Mikado's Empire, 1876"
の一部 (東京大学図書館蔵)

九 條 武 子

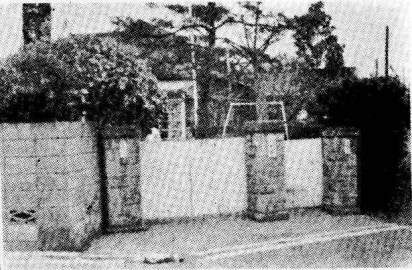


武子筆跡
上段左—杉並区和泉町の和田堀廟所にある武子の墓
「無憂華」—昭和二年七月刊
(昭和女子大学蔵)

上段右—武子肖像
上段中—「白孔雀」
昭和四年十二月刊
「薰染」—昭和三年十一月刊
中段右
「金鈴」—大正九年六月刊
以上三冊 (昭和女子大学蔵)

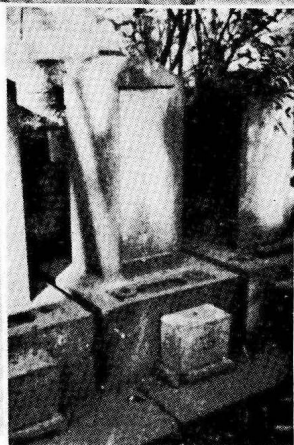
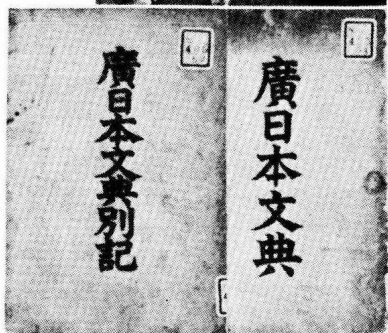
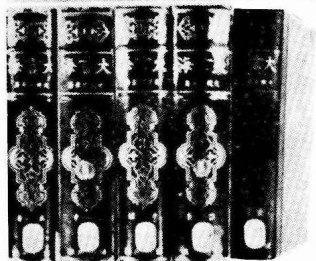
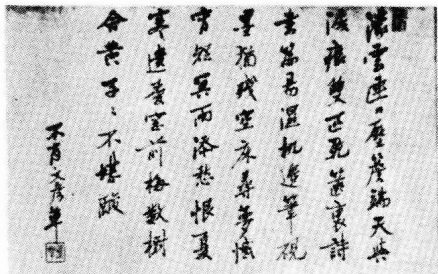


築地本願寺境内左角にある歌碑

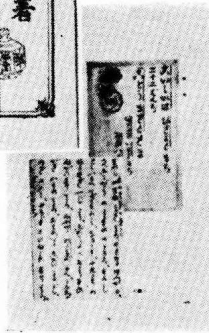


大正十五年五月建設した感化院の真宗婦人会付属六華園の本舎

大 槻 文 彦



上段右—文彦肖像（大槻茂雄氏蔵）
「広日本文典」—明治三十年一月刊（昭和女子大学蔵）
「広日本文典別記」—明治三十年一月刊（昭和女子大学蔵）



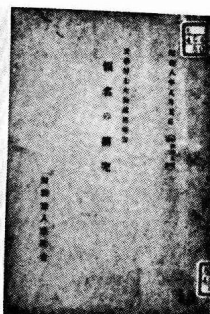
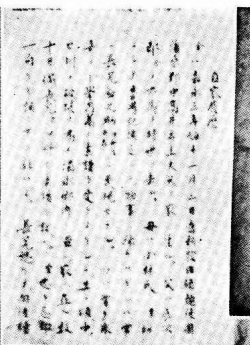
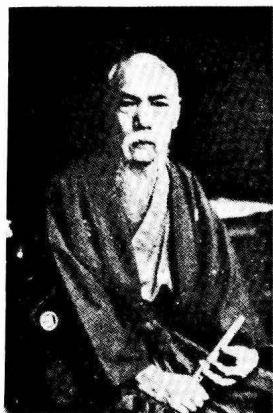
かながきのはがき

上段左—文彦筆蹟
（大槻茂雄氏蔵）
中段中—「大言海」索引共五
巻—昭和七年十月、昭和十二
年十一月刊
（昭和女子大学蔵）
「復軒雜纂」—明治三十五年
十月刊（国立国会図書館蔵）

港区下高輪町の東禅寺内
にある文彦の墓（中央）

透 矢 大

透肖像



「仮名の研究」——大正十五年八月刊
(昭和女子大学蔵)
自筆未刊の「自家履歴」
(浅田夏子氏蔵)

「仮名遣及仮名字体沿革史料」
—明治四十二年三月刊(国会図書館蔵)



「韻鏡考」——大正十三年十二月刊
(昭和女子大学蔵)



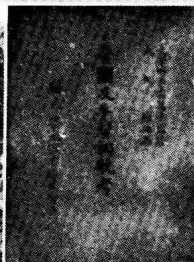
假名源流考

國語調査委員會編纂

株式會社 國定教科書共同販賣所

三井物産株式會社

伴保國此五世湯村太左衛門見海所而需
余此五世命一欲治過大分速見湯見下役持
度更之命命此五世命而湯村者重則有
治起者然此五世命我速所屬今在
此中石上之見湯之貴乎一初世時年於今



中段左—「假名源流考證本写真」本文
—明治四十四年九月刊
(国立国会図書館蔵)

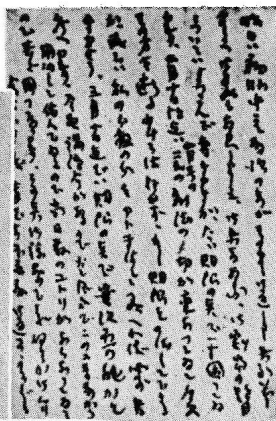
中段中—「假名源流考」
明治四十四年九月刊
(同上)

「音図及手習詞歌考」——大正七年八月刊
(国会図書館蔵)

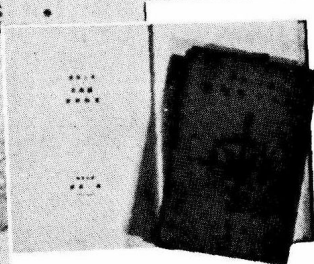
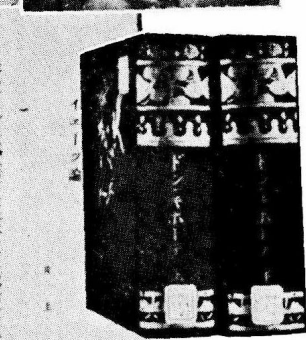
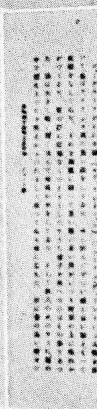
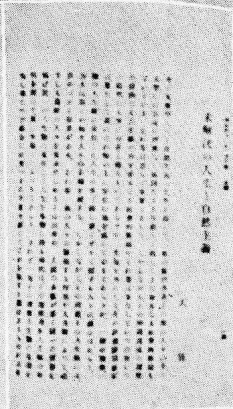
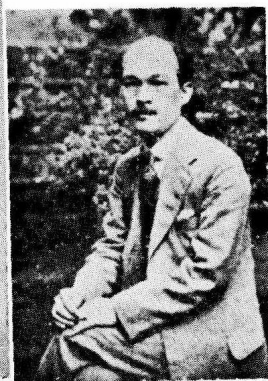
←東京都文京区雑司ヶ谷墓地にある透の墓

片 上 伸

喜安 磯太郎宛ハガキ
「文学評論」 一 大正十五年
十一月刊 (昭和女子大学蔵)



伸 肖像



「ロシヤの現実」 一大正八年五月刊
(昭和女子大学蔵)
中段右「ドン・キホーテ」 上・下
一大正四年十一月刊 (昭和女子大学蔵)
「露西亜文学研究」 一 昭和三年四月刊
(昭和女子大学蔵)



神奈川県鶴見の曹洞宗大本山
総持寺にある伸の墓

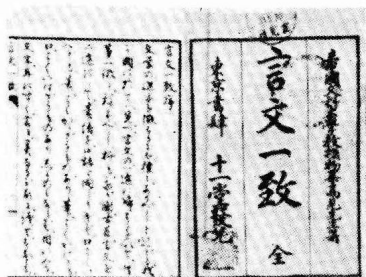
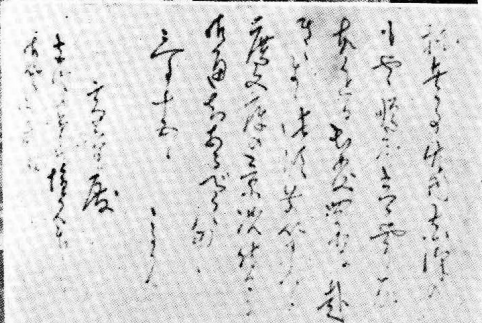
中段中右から
「イエーツ論」 一 (早稲田文学 明治四十
四年五月所載)
「未解決の人生と自然主義」 一 (同誌 明
治四十一年二月所載)
「英国の自然派」 一 (同誌 明治四十年五
月所載)
(以上昭和女子大学蔵)

物 集 高 見

高見肖像



高見宛の書簡（物集高量氏蔵）



「言文一致」—明治十九年三月刊
（昭和女子大学蔵）



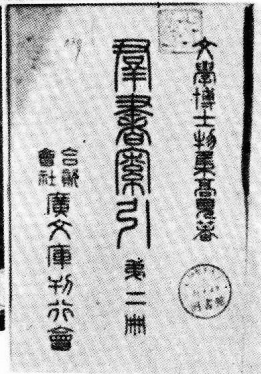
大分県杵築市寺町にある高見の墓



「標注世継之歌」—明治二十八年一月刊（昭和女子大学蔵）



「かなづかひ教科書」—明治十九年四月刊
（昭和女子大学蔵）



高見編纂の「群書索引」の一部
大正五年十一月刊（昭和女子大学蔵）

目次

口	第二十八卷の成立	(三)
凡	例	(一七)
徳	富 蘆 花	(一九)
W・E・グリフィス		(三三)
九	條 武 子	(二九)
大	槻 文 彦	(三七)
大	矢 透	(二五)
片	上 伸	(三五)
物	集 高 見	(四五)
近代文芸年表	(表)	(四七)
巻末付記		(四七)

第二十八卷の成立

本巻には昭和二年九月から昭和三年三月までに歿した左記七名を収めた。

徳富蘆花は明治元年（一八六八）十月二十日肥後国葦北郡水俣村に、惣庄屋兼代官の家柄なる徳富一敬の次男として生まれた。蘇峰猪一郎は彼の実兄である。早くキリスト教にふれ、大江義塾、同志社に学んだが、新島襄の義理の姪との恋愛に破れて同校を去り、やがて明治二十二年（一八八九）上京して蘇峰の主宰する民友社に入社した。しかし、その才能は容易に認められず、鬱結した日々を送っていた。二十七年五月、原田愛子と結婚。明治三十一年、処女創作集「青山白雲」について、「国民新聞」に長編「不如帰」を発表、彼の出世作となった。この作は明治三十三年単行本として出版されると空前の売れ行きを示し、つづく小品集「自然と人生」もまたひろく愛読された。かくて「思出の記」（明三三）「黒潮」（明三五）等を執筆、彼の作家としての名声は高まったが、兄蘇峰と絶交し、ひとりで「黒潮社」を創立、「黒潮第一」を出版（明三六・三七）した。明治三十九年、聖地パレスチナとトルストイの訪問を果たし、翌四十年、千歳村粕谷に移住、「美的百姓」の田園生活に入った。以後、文壇とは孤立して「みみずのたはこと」（大二）「新春」（大七）などを書いたが、大正八年「日本から日本へ」の旅に出で、十年にこの紀行をまとめて刊行、十三年五月から自伝小説「富士」を刊行しはじめたが

健康すぐれず、昭和二年九月十八日、死の床で兄蘇峰と和解し、同夜半に歿した。享年五十八歳。

W・E・グリフィスは、一八四三年（天保一四）九月十七日、アメリカ合衆国のフィラデルフィアに生まれた。父のジョン・リメバーナは船長で、彼は七人兄妹の第四子であった。家計の貧困のため、彼は一時高校を中退、兵役に服したりもしたが、一八六五年ラトガース大学に入学、優秀な成績をおさめた。この間日本人留学生の日下部太郎を知ったことが、後年の日本渡航の契機となった。かくして一八七〇年（明三）彼は日本に來航、翌一八七一年から福井の明新館で外人教師として理化学を講じ、同藩の人々の啓蒙に尽した。明治五年大々南校の理化学教師に転じ、さらに七年からは開成学校化学教授となり、多くの俊秀を教育した。間もなく同年七月にアメリカに帰国し、以後は牧師としてまた文筆業者として生涯を送ったが、“The Mikados Empire”（皇國）をはじめとする多くの日本紹介の著述を公けにし、日本の真の姿を世界に伝えることにつとめた。わが国にとって長く忘れえぬ恩人の一人である。一九二八年（昭三）アメリカ、フロリダ州ウィンター・パークに歿した。八十五歳。

九条武子は、明治二十年（一八八七）十月二十日、京都西本願寺二十一代法主大谷光尊の二女として生まれた。京都師範学校付属小学校六年で中退し、もっぱら家庭教師について教養を高めた。日露戦争の勃発を契機に、西本願寺では仏教婦人会が組織され、彼女は連合本部長として活動した。明治四十二年、二十二歳で男爵九条

良致と結婚。同年十二月良致のケンブリッジ大学留学の見送りを兼ねて同道洋行し、翌四十三年单身帰国した。以後大正九年十二月良致帰国にいたるまでの十年間、孤閨をまもりつつ夫への慕情を和歌に託した。すなわち、大正五年佐佐木信綱に入門して「心の花」を中心に作歌を発表、やがてそれらを「金鈴」（大九、竹相会刊）にまとめた。夫の帰国後は関東大震災の災禍を受けながらも宗教的社会活動に挺身し、他方戯曲「洛北の秋」（大二三）や歌文集「無憂華」（昭三）にその文芸的才華を示した。昭和三年二月七日、一代の麗人として惜しまれつつ急逝した。享年四十二歳。

大槻文彦は弘化四年（一八四七）一月十五日、江戸木挽町四丁目の仙台藩邸に、清崇（磐溪）の三男として生まれた。次兄清修（如竜）がある。大槻家は祖父玄沢、父磐溪ともに蘭学、漢学に秀で、文彦もまた好学の少年として家学を受け、文久三年（一八六三）養賢堂の助教となった。かたわら、蘭学、英学を学び、明治三年大学南校に入り、翌年箕作秋坪、奎吾の三文学舎でさらに英学を修めた。明治五年文部省に入り、翌年宮城師範学校長となり教育に尽瘁したが、明治八年辞任して文部省報告課に勤務、「言海」の編纂に着手した。国語辞書の編纂は彼の生涯を賭ける大事業となったが、その一方「広日本文典」（明三〇刊）を著わして日本語文法の体系的な研究を進め、またかなのくわい運動を興して国語国字問題への情熱を披瀝した。明治二十二、四年に「言海」は完成刊行されたが、彼は後半生をその増補に傾注、死後「大言海」として結実した。本書が国語辞書の最高峰の一つであることは今日周知である。昭和三年二月十七日、八十二歳をもって永眠した。

大矢透は嘉永三年（一八五〇）十二月三日、越後國中蒲原郡根岸村に名主辰次郎の第八子として生まれた。早く父を失ったが、賢母美代子の薫陶を受けて学問にいそしんだ。戊辰の役に従軍したりもしたが、明治八年新潟師範学校に入学、翌年卒業後各地の中等学校教諭を転々した。その間文法教科書「語格指南」（明一三）を刊行、独自の音声学的研究の萌芽を見せつつあった。明治十九年文部省に入り、伊沢修二の知遇を得て二十四年から大日本図書に入社して教科書の編纂に従事したが、明治三十六年から仮名研究に着手、やがて「仮名遣及仮名字体沿革史料」を脱稿し、進んで周代古音の研究に歿頭し、「韻鏡考」（大二三刊）その他を執筆、同時に「仮名の研究」（大二五刊）によって学位を得た。これらの業績は、従来ほとんど未開拓であった分野に始めて科学的研究のメスを加えたもので、わが国語学史上に不滅の功績を止めている。昭和三年三月十六日、七十九歳の生涯を閉じた。

片上伸は、明治十七年（一八八四）二月二十日、愛媛県野間郡波止浜村に地主、庄屋の子として生まれた。彼の幼少時に家運が傾き、彼は苦学しつつも愛媛県尋常中学校を経て東京専門学校（現、早稲田大学）に学んだ。一旦病気のため退学、郷里で小学教員となったが、明治三十五年早大文科に再入学、三十九年同校を卒業した。「早稲田文学」記者となり評論に筆を執るかたわら、四十年から早大高等予科講師に就任、英語を講じ、四十三年以降大学部本科の教授に任ぜられて英文学を担当した。とき正に自然主義が一世を風靡しており、彼は天啓の筆名を以て「未解決の人生と自然主義」（明四二）等、一連の評論を発表、当代自然派の有数の論客にかぞえ